

# 話し手の推測を表す「～とみえる」「～とみられる」

井上 優

## 0. はじめに

「みえる」と「みられる」が次のような形で類義表現として対をなすことがある。

- (1) 今年は暖冬だと みえる。
- (2) 今年は暖冬だと みられる。
- (3) 被害者は棒のようなものでなぐられたと みえる。
- (4) 被害者は棒のようなものでなぐられたと みられる。

これらの文において、「～とみえる」「～とみられる」は「～思われる」「～のようだ」と同じく話し手の推測を表している。本稿では、このような「～とみえる」「～とみられる」を推測の「みえる」「みられる」と呼び、その意味について考える<sup>(1)</sup>。

## 1. 推測の「みえる」「みられる」

ここで「推測のみえる・みられる」とよぶのは、「発話時における話し手の推測という心的態度」を表す「みえる」「みられる」、すなわち、モダリティ表現として機能すると考えることのできる「みえる」「みられる」である。以下、その特徴を簡単にみる。

### 1.1. 「だろう」との共起

推測の「みえる」「みられる」は、話し手の推量を表す「だろう」とは共起しない。

- (5)<sup>×</sup> 今年は暖冬だと みえるだろう。
- (6)<sup>×</sup> 今年は暖冬だと みられるだろう。
- (7)<sup>×</sup> 被害者は棒のようなものでなぐられたと みえるだろう。
- (8)<sup>×</sup> 被害者は棒のようなものでなぐられたと みられるだろう。

話し手の推測を表す助動詞「らしい」「ようだ」も「だろう」とは共起しない。

- (9)<sup>×</sup> 今年は暖冬らしいだろう。
- (10)<sup>×</sup> 今年は暖冬ようだだろう。
- (11)<sup>×</sup> 被害者は棒のようなものでなぐられたらしいだろう。
- (12)<sup>×</sup> 被害者は棒のようなものでなぐられたようだろう。

「推測」と「推量」という異なる心的態度が発話時において話し手の中で同時に存

在することはありえないのである。

しかし、(5)(7)も次のような文脈では「だろう」と共起する。この場合、「みえる」は「～（の目）には～と映る」という意味の「みえる」であり、発話時における話し手の推測を表すわけではない。

(13) 今年は暖冬だと 世間の人には みえるだろう。

(14) 被害者は棒のようなものでなぐられたと 素人には みえるだろう。

また、(6)(8)も次のような文脈では「だろう」と共起するが、この場合は第三者によって推測されること（すなわち受身）を表し、話し手の推測を表わすわけではない。

(15) 今年は暖冬だと 世間の人からは みられるだろう。

(16) 被害者は棒のようなものでなぐられたと 素人からは みられるだろう。

(5)(6)(7)(8)を適格とする話者は、(13)(14)(15)(16)のような内容に解釈しているものと考えられる。

## 1.2. テイル形

推測の「みえる」「みられる」はテイル形にならない。「みえている」「みられている」は持続相を表し、それゆえ発話時という「瞬間的現在」における話し手の心的態度の叙述とはならないのである（中右1979参照）。

(17)<sup>x</sup> 今年は暖冬だと みえている。

(18) 今年は暖冬だと みられている。

(19)<sup>x</sup> 被害者は棒のようなものでなぐられたと みえている。

(20) 被害者は棒のようなものでなぐられたと みられている。

(18)(20)は不適格な文ではないが、話し手の推測ではなく、第三者の（時に世間一般における）見解を表す。この場合「みられる」は受身を表していると考えてよからう<sup>(2)</sup>。

(21) 今年は暖冬だと 一般には みられている。

(22) 被害者は棒のようなものでなぐられたと 鑑識では みられている。

## 1.3. 推測の主体の明示

推測の「みえる」は、推測判断の主体である話し手が明示されることはない。明示された場合、「みえる」は（推測というより）「（話し手の）目に映る」という意味が出てくる。

(23) 今年は暖冬だと みえる。

(24) 私には 今年は暖冬だと みえる。

(25) 被害者は棒のようなもので殴られたと みえる。

(26) 私には 被害者は棒のようなもので殴られたと みえる。

また、推測の「みえる」は、「～とみえ(て)」の形で、主節が叙述する既成の状況に対する推測的説明を表すが(2.2.参照)、話し手が明示された場合はそれができない。

(27) 今年は暖冬だとみえて、なかなか初雪が降らない。

(28)<sup>×</sup>私には今年暖冬だとみえて、なかなか初雪が降らない。

推測の「みられる」についても、推測の主体である話し手が明示されることはない。

(29)<sup>×</sup>私には 今年暖冬だと みられる。

(30)<sup>×</sup>私には 被害者は棒のようなもので殴られたと みられる。

今後検討すべき興味ある問題である。

## 2. 推測の「みえる」「みられる」の意味

推測の「みえる」「みられる」は、意味が似ている上に、表す内容が話し手の心的態度に関することだけに、使われ方は個人によって微妙に異なる。しかし、やはり両者には意味の違いがある。以下では、推測の「みえる」「みられる」が、それぞれ知覚動詞としての「みえる」、認識動詞としての「(～と)みる」の性質を反映していることをみることになる。

### 2.1. 「らしい」「ようだ」と「みえる」「みられる」

「みえる」「みられる」が話し手の推測を表すといっても、一般に話し手の推測を表すといわれる助動詞「らしい」「ようだ」と同義というわけではない。

確かに、モダリティ副詞「どうも」「どうやら」と共起する点、「みえる」「みられる」と「らしい」「ようだ」は同じ性質を持つ。そのことは「だろう」との比較においてよりはっきりする。

(31) どうも(どうやら) エイズが日本に入ってきたらしい/ようだ。

(32) どうも(どうやら) エイズが日本に入ってきたと みえる/みられる。

cf.<sup>×</sup>どうも(どうやら) エイズが日本に入ってきただろう。

しかし、「～によると(よれば)」などの「情報のでどころ」を表す表現との共起になると事情は異なる。

(33) 聞いたところによると どうもエイズが日本に入ってきたらしい。

(34)<sup>(?)</sup> 聞いたところによると どうもエイズが日本に入ってきたようだ。

(35) <sup>×</sup>聞いたところによると どうも エイズが日本に入ってきたと みえる/

みられる。

「らしい」「ようだ」が持つ「伝聞的」な要素は、推測の「みえる」「みられる」にはないのである。しかし、「～からすると」「～からして」などの「判断のよりどころ」を表す表現と推測の「みえる」「みられる」は自然に共起する。

- (36) この症状からすると どうやら太郎はエイズではないらしい。
- (37) この症状からすると どうやら太郎はエイズではないようだ。
- (38) この症状からすると どうやら太郎はエイズではないと みえる／みられる。

## 2.2. 特定の状況との結びつき

推測の「みえる」のテ形「みえて」は、次のように挿入句的に用いられることがよくある。

- (39) 今年は暖冬とみえて、一月になっても積雪がない。
- (40) 犯人はこのドアから中に入ったとみえて、鍵が壊されている。

「～とみえて」は、主節の表す既成の状況について推測的説明を加える。この点、いわゆる「はさみこみ」と類似の機能、すなわち主節が叙述する既成の状況に対して、コメントを加える機能をはたしている。

- (41) 今年は暖冬なのだろう、一月になっても積雪がない。
- (42) 犯人はこのドアから中に入ったのだろう、鍵が壊されている。

テ形に限らず、推測の「みえる」が用いられる文脈は、ある状況（文として現れることもあれば現れないこともある）が成立していて、話し手はその状況に対する推測的説明を加えている、という文脈である。

- (43) （一月になっても積雪がない状況にあって）今年は暖冬と みえる。
- (44) （鍵が壊されているのをみて）犯人はここから中に入ったと みえる。

「みえる」は、特定の状況の存在を前提としているのである。

一方、「みられる」には、特定の状況に対する解説という意味はない。実際、「みられる」のテ形「みられて」を挿入句として用いるのは不自然である。

- (45)? 今年は暖冬とみられて、一月になっても積雪がない。
- (46)? 犯人はこのドアから中に入ったとみられて、鍵が壊されている。

「みえる」は特定の状況と強く結びついているが、「みられる」は特にそのようなことはないのである。

### 2.3. 推測される内容の性質

「みえる」と「みられる」では推測される内容に違いがある。「みられる」の場合、判断の内容は、一定の手続きをふんだ考察の結果得られた「論理的（意識的）」判断であるのに対し、「みえる」の場合は、ある状況に対する話し手自身の「自然発生的（無意識的）」判断という意味が強い。

(47) めずらしく化粧などして 花子も今日はデートだと みえる。

(48)<sup>?</sup> めずらしく化粧などして 花子も今日はデートだと みられる。

(49) あの赤い顔からして 酒を飲んできたと みえる。

(50)<sup>?</sup> あの赤い顔からして 酒を飲んできたと みられる。

この例で「みられる」を使うのはいささか大げさである。「デートである」「酒を飲んできた」というのは、「化粧をしている」「赤い顔をしている」という状況をふまえた考察の結果としての結論というよりも、むしろ、その状況から「自然に」連想されるものだからである。知覚動詞としての「みえる」の基本的な意味は「対象が自然に目に入ってくる」ことであるが、その「自然発生的」側面が推測の「みえる」にも反映されているといえよう。

逆に、普通直感的には思いつかない内容の場合、「みえる」は不自然である。

(51)<sup>?</sup> 売上税の導入は庶民の生活に大きな影響を与えると みえる。

(52) 売上税の導入は庶民の生活に大きな影響を与えると みられる。

(53)<sup>x</sup> 多いところでは20ミリの雨量があると みえる。

(54) 多いところでは20ミリの雨量があると みられる。

「売上税の導入は庶民の生活に大きな影響を与える」は、普通ある状況から自然に連想されることではない。また、(53)の場合、「20ミリの雨量がある」という精密な予測は、かなり高度の予測であり、話し手の頭の中に自然に浮かぶようなことではない。もちろん(53)も、「ある場所の雨の降りぐあいを見るだけで、他の場所の降水量を自然に予測できる」特殊な能力を持った予報官が言ったという文脈であれば適格であろう。

また、(51)も、次のような文脈では自然であろう。

(55) 最近、売上税に対する反対運動が予想以上に盛り上がっているが、売上税の導入は庶民の生活によほど大きな影響を与えるとみえる。

(55)は、「売上税の導入が庶民の生活に大きな影響を与える」ということは知っているが、「反対運動の予想以上の盛り上がり」に「売上税の影響がよほど大きい」ことが自然に察せられた、という文脈である。話し手の頭の中に自然に浮かんだのは「売上税の影響の程度」であって、「売上税が生活に影響を与えること」そのものではない。

つまり、「みられる」という背景には何らかの「話し手の意識的、論理的な推測活動」が存在するが、「みえる」にはそれがない、ということである。ここに、認識動詞としての「(～と)みる」(＝客観的根拠をもとに判断する)の性質が「みられる」に反映されていることをみることができる(認識動詞としての「みる」の詳細はここでは省略する)。このことは、話し手の積極的な思考活動を表す語句と「みられる」は自然に共起するという点にも反映される。

(56)<sup>×</sup> これらの資料から判断するに、多いところでは20ミリの雨量があるとみえる。

(57) これらの資料から判断するに、多いところでは20ミリの雨があるとみられる。

(58)<sup>×</sup> アンケートの結果から考えて、売上税には国民の大多数が反対しているとみえる。

(59) アンケートの結果から考えて、売上税には国民の大多数が反対しているとみられる。

2.1.で「～からすると」「～からして」などの「判断のよりどころ」を表す表現と「みえる」「みられる」は自然に共起する、ということを見たが、それらは、「自然発生的／論理的」という点では中立的なのだと考えられる。

#### 2.4. 推測の決め手となる情報

「みえる」と「みられる」には、推測の決め手となる情報の性質に関する違いがみられる。「みえる」の場合、推測の決めてとなるのは、推測される内容の直接的な反映であると(話し手に)捉えられる状況である。一方、「みられる」の場合は、特にそのような意味あいはない。

(60) 浩宮様も結婚相手をお決めになったとみえる。

(61) 浩宮様も結婚相手をお決めになったとみられる。

(61)は週刊誌の記事にあるような文である。浩宮に会ったこともない雑誌記者が皇室に関するさまざまな情報を総合して推測したことを述べている、という文脈も充分ありうる。記者にとって、個々の情報は「浩宮様が結婚相手をお決めになった」ことの直接的な反映であるというわけではないが、それらを総合するとひとつの結論が引き出される、というわけである。この点、「みられる」は「総合的」な判断を表すといえよう。

一方、(60)は浩宮の特定の言動に直接接した(あるいは、人から伝え聞いた)人の発言であると解釈されるのが普通である。すなわち、浩宮の特定の言動のなかに「結婚をお決めになった」ことを自然に察した、という文脈である。その場合、浩宮の言動

が「結婚をお決めになった」ことの直接的な反映として捉えられている。いわば、ある状況を映し出す「鏡」としての特定の状況が、「みえる」には必要なのである。また、そうでないと「自然発生的」な判断、すなわち「無意識的」な判断は不可能である。

## 2.5. 「主観性」と「客観性」

ここまで、「みえる」の自然発生性、「みられる」の論理性ということを中心に述べてきた。そのことは、「みえる」の「主観性」に対する「みられる」の「客観性」という形でも反映される。

例えば、ニュースにおいて「みられる」はしばしば用いられるが、「みえる」は決して用いられない。

(62) 明日は雨になるとみえます。

(63) 明日は雨になるとみられます。

(62)そのものは不適切ではないが、ニュースという文脈の中では不自然である。いかにもアナウンサー自身の「勘」を伝えられているようなニュアンスがあるからである。

「みえる」はあくまで話し手自身の「直感」を述べるための形式であり、主観の域を出るものではない。それに対し、「みられる」はその「総合的」判断という性質上、一種客観的なニュアンスの強い叙述としての資格をもつにいたると考えられる。

そのことが反映していると思われる興味深い事実がある。それは、理由の従属節「～ノデ」に「～とみられる」は生起することができるが、「～とみえる」はできないということである<sup>(3)</sup>。

(64)<sup>x</sup> 明日は雨が降るとみえるので、傘を忘れないようにしてください。

(65) 明日は雨が降るとみられるので、傘を忘れないようにしてください。

推量、推測を表わす「だろう」「らしい」「ようだ」についても、「だろうので」は不適格だが、「らしいので」「ようなので」は適格であるという事実がある（南1974参照）。

(66)<sup>x</sup> 明日は雨が降るだろうので、傘を忘れないようにしてください。

(67) 明日は雨が降るらしいので、傘を忘れないようにしてください。

(68) 明日は雨が降るようなので、傘を忘れないようにしてください。

理由を表す従属節「～ので」の中では、「らしい」「ようだ」は「話し手の判断」そのものというより、「明日雨が降ると推測されるような状況」の叙述という性質が強まると考えられる。同じことが「みられる」の場合にもあてはまるのだろう。「みられる」の場合、推測を支える客観的事実、また結論に至るまでの論理的思考過程が重

要であり、文脈によってはそれらが前面に押し出されてくるということである。

一方、「みえる」の場合は、あくまで「発話時における」話し手の直感が前面に出され、客観的な叙述にはならない。その点では、「だろう」に近いともいえる。なぜ、話し手の主観が前面に出る「みえる」「だろう」が「～ので」に生起しないかという問題は、従属節の情報価値という視点からの検討が必要であるが、本稿の内容とは直接関係ないので省略する。

### 3. まとめ

残された問題は多いが、基本的には「みえる」「みられる」の意味の違いは次のように捉えてよいだろう。

#### (i) 「みえる」

発話時において、ある特定の状況が成立することを、既成の状況から自然発生的に判断すること。

#### (ii) 「みられる」

発話時において、ある特定の状況が成立すると判断可能であること。

「みえる」の基本的な意味は「対象が自然に視覚に入っていること」であるが、その「自然発生的」側面は、推測の「みえる」にも反映される。一方、「みられる」は認識動詞としての「～みる」の性質が強く反映されている。2.2.でみた「論理的推測によって得られる結論」を表すという性質は、まさにその反映である。

### 注

1 本稿では、「文十と みえる／みられる」という形についてのみ考察する。したがって、「老人にみえる」「ふけてみえる」「若くみえる」、また「～ようにみえる」「～ものとみられる」などの形式は、ここでは扱わない。

2 ル形とテイル形のこのような意味の違いは、「考えられる」「思われる」等の話し手の「認定作用」を表す形式についてもなりたつ。

(69) そのうち円高も是正されると 思われる／思われている。

(70) 異常気象はしばらくの間続くと 考えられる／考えられている。

3 興味深いことに、きわめて意味が似ているようにみえる「思える／思われる」にも同じことがあてはまる。

(71)<sup>×</sup> 明日は雨になると思えるので、傘を忘れないようにしてください。

(72) 明日は雨になると思われるので、傘を忘れないようにしてください。



／参考文献／

- 蔦原伊都子 1983 「視覚動詞「みる」・「みえる」の意味記述」『語文』42  
寺村 秀夫 1983 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版  
中右 実 1979 「モダリティと命題」『英語と日本語と』くろしお出版  
益岡 隆志 1984 「叙述性補足語と認識動詞構文」『日本語学』Vol.3, No.7  
南 不二男 1974 『現代日本語の構造』大修館書店  
森田 良行 1977 『基礎日本語』角川書店  
————— 1984 『日本語の発想』冬樹社

言語経歴：1962年富山県東砺波郡井波町生まれ

0歳～18歳 井波町 18歳～23歳

宮城県仙台市 23歳～ 東京都

(東京都立大学大学院学生)